L2T

本科１期４月度

解答

Ｚ会東大進学教室

高２難関大国語

1章

【問題】（演習）

出典…村上陽一郎『歴史としての科学』／中央大学　商学部　95年

文章略解

ヨーロッパに根付いていたキリスト教では、歴史は神の意志によって決定され、その終わりに神の「救済」があると考えられていた。しかし、自然を支配し制御するために生みだされた近代科学によって、自然の支配者は神から人間に移り、歴史を作る者もまた人間へと移行した。人類は自然を支配し、「救済」の概念をも成し遂げようとしたのである。このような世界観の中で「進歩」という理念が生まれたわけであるが、今日その世界観は自明の真理ではなくなり、「進歩」という理念にも問題が浮かび上がっている。

解答

問1　C

問2　2＝D　3＝C　4＝B　5＝A

問3　6＝C　7＝B　8＝D　9＝A

問4　A・D

【問題】（自習）

出典…村上陽一郎『近代科学を超えて』／中央大学　法学部　95年一部改

文章略解

自然保護が議論される際、保存されるべき自然環境として想定されるものはしばしば、観念の中で理想化され、固定された絵はがきのごときものにすぎない。すなわち、現実には存在しない。そこには人間存在が欠落している。自然とは元来人間をもその中に含んだ概念である。そのことを、我々はともすれば忘れがちなのだ。したがって、人間が「自然」を変容するのは、それ自体が必然的に自然なあり方なのである。

解答

問1　①＝環境　②＝郷愁　③＝概念　④＝起源

問2　(ウ)　**問3**　(ア)

問4　(オ)　**問5**　(イ)

問6　人間も被造物として自然の一部であるという西欧的発想を考慮すれば、人間の営みだけを人為として自然から切り離すことを不自然とすることは、常識で考えるほど矛盾を孕んではいない、ということ。〔91字・解答例〕

問7　「バーバリズム」とは「文化」に対置されるところの「自然」の側に属するものだが、「文化」も人間存在も本来「自然」に属するとすれば、「文化」と「自然」の対立の図式そのものが成立しなくなるから。〔93字・解答例〕

解説

問2　最初にAを見てみよう。直後に「のごとき姿」とあるから、当然比喩だが、どういう比喩になるのだろうか。

まず着眼しなくてはならないのが、直前の連体修飾部「トンボやカブトムシがふんだんに群生し、川には魚が溢れ、空が青く、緑濃き山に恵まれた」である。続いて、Aを含む文の主語である「それが」という指示語が受ける内容をたどる。冒頭の一文の「保護され保存される自然やカンキョウ」だ。さらに、Aを含む文の次の文で「そのような『自然』の姿は」とやはり指示語で受け継がれて、「地球上どこを探しても、むしろ見つけることのできない観念のなかで［B］された『自然』に過ぎない。」と締めくくられる。この三点を記憶しておく。

今度はC。直前の連体修飾部にやはり「観念化された」とあり、「自然のなかで生きている人間存在が欠落している」と続く。

以上を念頭に置いて選択肢を見る。(ア)劇場や(イ)公園では、人間に近すぎる。(エ)思い出では、過去に限定されてしまうが、その必然性がない。また、(オ)風景では、比喩にならない。

問3　**問2**の解説の中に空欄Bが出てきたように、根拠となる場所はほぼ同じである。「トンボやカブトムシがふんだんに群生し、川には魚が溢れ、空が青く、緑濃き山に恵まれた」が最も重要。これは具体的なイメージで、「抽象化され」とは対極にある。したがって、(ア)か(ウ)。しかし、「個別化」というように、多様なものにばらばらに分散していくような叙述の出てくる根拠がない。「絵はがき」といえば、「理想化」も「固定化」も納得がいくだろう。

問4　空欄Dの直前「自然を『自然に放置された』『人為を加えない』ものと解釈する傾向がある。」と、直後「人間が自然に加えるいかなる改変も、それ自体本来悪となる、という形で、『自然』が絶対価値と見なされることにもなりかねない。」とは、論理の展開が自然な、順接の因果関係にある。文末「傾向がある」と「ことにもなりかねない」の関係に特に留意しよう。したがって、(オ)の「それゆえ」が最も適当で、続いて(エ)「そして」、(ア)「また」の順になる。他は逆接だから、論外。

空欄Eは、次に「西欧的発想に立てば」とある。空欄Dの前の文の「日本では」と比較対照させている。しかも、直前の日本のあり方に筆者は批判的で（そのことは「ことにもなりかねない」という言い回しにも現れている）、これを否定する形でこの空欄があり、比較の対象としての「西欧的発想」につなげている。直前の否定と比較対照の両方の機能を果たすのは、逆接の接続語。

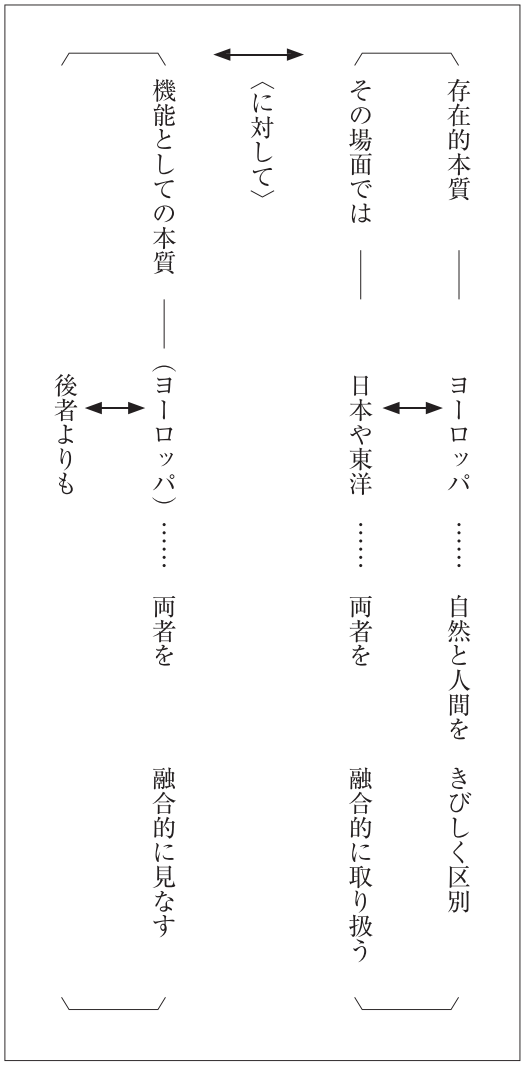
したがって、(オ)の「だが」が最も適当で、続いて比較だけを示す(ア)「一方」。(イ)「そこで」と(エ)「したがって」は順接だから、論外。(ウ)「しかも」は、前後を対等な立場で並べてしまう。

以上から、(オ)が最適とわかる。

問5 「両者」は、すぐ前にも「両者を融合的に取り扱う日本や東洋……」と出てきている。この「融合的に……日本や東洋」は、さらに前の「自然と人間の存在的本質をきびしく区別したヨーロッパ」と対置される。「両者」に結びつくのは「自然と人間」の要素だ。

「後者」の方は、この「自然と人間の存在的本質をきびしく区別したヨーロッパが、……両者を融合的に取り扱う日本や東洋に対して」という流れから、ヨーロッパと日本や東洋との比較の対立軸を受けたものと考える。

次の図式を本文に確認することで、勉強してほしい。



問6　まず、「この事態」の内容から考えよう。直前の「が」という逆接の接続助詞に注目する。これは、逆接であるとともに条件節を作ってくれるものだ。「……はパラドキシカルかもしれないが、……はパラドキシカルではない。」という構造から、「……」部分同士が重なる。すなわち、「……ヨーロッパが、……機能としての両者（＝自然と人間）の本質を、……融合的に見なすというのは」＝「この事態は」ということになる。更に「　」内の「その場面では」という指示語に着目すると、「人間の営みだけを人為として自然から切り離すことを不自然と受け取る」の部分がここと重なってくる。（左図参照）

続いて「外見ほど……パラドキシカルではない。」の部分。「パラドキシカル」とは、**（注）**にあるとおり「逆説」の意だが、これは「一見矛盾を孕んだ真理」のこと。「ヨーロッパ」についての前提である「自然と人間の存在的本質をきびしく区別した」と、「東洋や日本」についての「両者を融合的に扱う」という前提とを、先の結論部「ヨーロッパが、……機能としての両者（＝自然と人間）の本質を、後者よりも融合的に見なす」と照らし合わせてみれば、前提と結論とが矛盾することは明らか。この明らかな矛盾が「外見ほど……パラドキシカル」ということ。これを「ではない」と否定する形でまとめる。範解では、これを「常識で考えるほど矛盾を孕んではいない」とまとめた。

最後に「絶対的創造神の媒介を考えあわせれば」という条件節の部分。これは、先に見た「この事態」と重なる部分の条件節同士を結び付けて考える。すなわち、「西欧的発想に立てば」「人間も自然の一部（被造物）である以上」「その場面では」を結び付ける。

西欧的発想に立てば、人間も自然の一部（被造物）である以上、
　⇩人間の営みだけを人為として自然から切り離すことを不自然と受け取る
その場面では
　⇩ヨーロッパが、……機能としての両者（＝自然と人間）の本質を、……融合的に見なす〔パラドキシカルかもしれない〕
　　〈が〉
絶対的創造神の媒介を考え合わせれば
　⇩この事態〔外見ほど……パラドキシカルではない〕

問7　「言葉本来の意味での『バーバリズム』は、」という主語と「人間存在とともに、絶対不可能な虚辞となった」の述語部分とを結ぶ、論理的中間項を答える設問。ヒントは「人間存在とともに」という部分。そこで、この「人間存在」に言及している直前部を見る。「バーバリズム」そのものの説明は、**(注)** に「野蛮（行為）」とあるだけだが、「『文化』は『自然』と対立させられることが多いが、」という、「が」で受けられる条件節の箇所が、この主語（＝条件）の部分と重なる。したがって、続く「実は、『文化』とは、人間を含む『自然』が果たした自然な変容ではあっても、『自然』の外にあるものではない。とすれば、人間存在自体が必然的に『自然』を自然に変容させるのであって」の部分が、目指す論理的中間項ということになる。これは、短くまとめると「『文化』も人間存在自体も『自然』内」ということ。これは、「『文化』は『自然』と対立させられる」という前提と真っ向から反する。このことは、「が、実は」というつながりからも明らか。そして、「実は」とあるとおりその後のほうが正しいとすると、「『文化』は『自然』と対立させられる」すなわち「言葉本来の意味での『バーバリズム』」は成り立たなくなる。

2章

【問題】（演習）

出典…若林幹夫『想像としての現実』／成城大学　99年一部改

文章略解

現代においては地球表面上の「現実」をありのままに写し取ったものが正しい地図とされるが、近代以前の地図は神話的・想像的モチーフが豊富に描かれていた。しかし、一切の想像的所産を排除したところに成立しているかのように見える近代的地図にも二つの例外がある。世界の全体像は我々が直接目にすることができない想像上のイメージであり、「国家」もまた想像的構成体である。社会にとっての現実とは、あくまで人間の想像力に支えられたものなのである。

解答

問1　(ア)　じゅうてん　　(イ)　くちく　　(ウ)　おお

問2　科学的　　問3　国家（46行目）

問4　(イ)・(ニ)　　問5　(ロ)　　問6　(ニ)

問7　それぞれの時代の思想や世界観を反映させているもの。〔25字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…岡本真佐子『開発と文化』／成城大学　01年一部改

文章略解

都市の持つダイナミズム、自由な空気は人々を引きつけるが、それは都市の一面に過ぎない。都市には貧困や不衛生などとはまた別の、人々のアイデンティティに関わる「危うさ」がある。マスコミや交通手段の発達により、移民は純化された「国民」のイメージを抱くようになり、それが、故郷においては内在するはずの矛盾や問題を見えなくしている。土地に根ざした文化に基づいたものではない「想像の集団」は都市において一層現れやすく、それが「危うさ」の感覚を募らせる。

解答

問1　ア＝すなぼこり　イ＝ひそ（んで）　ウ＝ぎょ（しがたさ）

問2　(ハ)　問3　(ニ)　問4　(イ)

問5　(ロ)　問6　(ハ)　問7　(ニ)

問8　(ロ)　問9　（Ⅰ）(イ)　（Ⅱ）(イ)　問10　(ニ)

解説

本文中（24行目）にも出てくるアンダーソン（Benedict Anderson）が著した『想像の共同体（Imagined Communities）』は、社会科学を学ぶなら必読の書であり、また実際に大学で読まされることも多いと思うが、高2の諸君は、最低限次のような「予備知識」を持っていて欲しい。それだけでも本文をかなり楽に読むことができるだろう。

近代以前の共同体意識（ムラ）
地縁・血縁＝直接対面関係

近代以降の共同体意識（国民国家 etc）
直接対面関係に基づかない「想像」の産物

かつて「ムラ社会」で人々が生活していた頃、彼等は村人の多くを直接「知って」いたのであり、そういった直接的な関係性が共同体意識を支えていた。ところが近代以降「ムラ社会」は徐々に瓦解し、代わって「国民国家」概念が出現する。考えればすぐに分かることだが、たとえば「日本人」全員を直接「知って」いる人間など存在しない。つまり、近代以降の共同体意識というのは、あくまで頭の中に思い描いたに過ぎない「想像の」産物だということである。

卑近な例を挙げれば、サッカーの国際試合の前に国歌斉唱をする際の昂揚感などは、まさに「未だ見ぬ」、そして「自分と同じように、今国家を斉唱しているであろう」同朋への仲間意識に支えられているし、ヒットチャートを賑わすアーティストのCDを購入して聴く時、同じく「未だ見ぬ」、そして「自分と同じように、今このCDを聴いているであろう」ファン仲間に思いを馳せる。

本文中にも再三出てくる「想像の」とは、こういうことを意味する。

問2　1行目からこの傍線(1)に至るまでの本文の構成を整理してみよう。

都市…進取の気運にみちたダイナミズムにあふれている（1行目）
外に向かって開かれた自由な空気が、どんどん人々を引きつけていく（4行目）
〈しかし〉
この「都市」の顔は非常に一面的である（7行目）

例…南アジア

街に活気があると自分の気持ちもつられて元気になる（9行目）

〈しかし〉

どうしようもなく「危うい」、あるいは「もろい」という感覚（11～12行目）

←

(1)この「危うさ」がうっすらと街を覆っている

この時点で選択肢(ロ)を排除できる。「危うさ」の原因を「人々をどんどん引きつける都市の『空気』」という〝ポジティヴ面〟に求めている点がおかしい。

さて、そこでこの「危うさ」というキーワードを本文中から追っていくと、

16行目～20行目

×

医療や福祉制度などの整備がまったく追いつかなくなる……

住むところもなく不衛生な環境……

大気汚染や病気、貧困や犯罪など

これまでにないほど深刻で危険

→

わたしが感じた「危うさ」とは、こういうあからさまな「危険」ではない

むしろ

←

○

人々の「アイデンティティ」の意識に関わるもの（22行目）

ここで選択肢(イ)を排除できる。「環境の悪化」というのは、右に挙げた「あからさまな『危険』」に入るものだからだ。

さて、そこでこの「人々の『アイデンティティ』の意識に関わるもの」の同義表現を追っていくと、

・新しい「アイデンティティ」（24～25行目）
・母国にいたときには感じたことのないような「国民」としての……アイデンティティ（32～33行目）
・このようなかたちでの「故郷」とのつながり、アイデンティティの「想像」（36行目）

などがあり、これらは

「一貫性」あるいは「連続性」を欠いており、不安定であると同時に熱しやすく、また突然現れるという御しがたさ（36～37行目）をもっており、これが

「危うさ」に通じている（38行目）

とある。ちなみに一番最後にも

この想像は、土地に根ざした、それを生きる人々によって支えられている文化に基づいているものではないだけに、いつどこに、どういうかたちで「想像の集団」が生み出されてくるのかが非常につかみにくく、それがいっそう「危うさ」の感覚をつのらせる（60～61行目）。

とある。以上をまとめると、

想像による国民意識・アイデンティティ

土地に根ざしたものではない
←
一貫性・連続性を欠いており不安定

←

「危うさ」

という流れになることがわかるだろう。よって答は(ハ)。

(ニ)は15～16行目と対応しているが、「楽観」できたのはあくまで以前のことであり、「今ではそれほど楽観できる状況にない」とあるので不適。

問3 「途上国の都市に限ったことだともいえない」ということは、

○途上国の都市

○先進国の都市

双方に見られる現象だということになる。

この時点で(イ)を排除できる。ここで言われているのは、「not only 都市 but also 地方」ではなく、「not only 途上国 but also 先進国」であるからだ。そこで、傍線部直後にアンダーソンの指摘を例にとり、

新しい「アイデンティティ」創出の原因

①マスコミュニケーションの発達（24行目）

②大量移民（24行目）

を挙げ、さらに進んで、

③飛行機、舟、列車などの交通手段の発達（25～28行目）

④テレビや新聞の情報、旅行案内のパンフレットなど、「故郷」のイメージを喚起するもの（28～32行目）

…これは①と同じと見てよい

を指摘する。

選択肢はいずれも②（移民・移住）についてしか言及していないが、

(ロ)は「先進国の人々のアイデンティティの意識」が変化したのではない。「先進国に移民としてやってきた人々のアイデンティティの意識」が変化したのである。

(ハ)は「移住による都市の人口増加は途上国だけにみられる問題」がおかしい。

よって答は(ニ)。

問4　本解説の冒頭で説明した「予備知識」、および**問2**の解説で述べた、

想像による国民意識・アイデンティティ

土地に根ざしたものではない

←

一貫性・連続性を欠いており不安定

を踏まえれば、すぐに(イ)が選べるはずだ。

(ロ)は「混合的なイメージ」がおかしい。33行目に「かなり純化されたかたちで」とある。

(ハ)は**問3**の解説で挙げた「新しい『アイデンティティ』」創出の原因である

①**マスコミュニケーションの発達**（24行目）

②**大量移民**（24行目）

③**飛行機、舟、列車などの交通手段の発達**（25～28行目）

④**テレビや新聞の情報、旅行案内のパンフレットなど、「故郷」のイメージを喚起するもの**（28～32行目）

のうち、①にしか触れていない点で不充分。

㈡は34〜35行目に「大量の移民がひとつのコミュニティをつくっているような場合には、このような新しいアイデンティティをつくりあげることはいっそう易しくなる」とあるように、あくまで「いっそう易しくなる」ケースを述べているに過ぎないので不適。

問5　これは容易。

・**たとえ故郷を遠く離れて出稼ぎにきているとしても**（25〜26行目）

・**人々が移住先で**（28行目）

とあることから、㈡「異国」がすぐに選べるはずだ。

問6　**問2**の解説で指摘したように、

・**新しい「アイデンティティ」**（24〜25行目）

・**母国にいたときには感じたことのないような「国民」としてのアイデンティティ**（32〜33行目）

・**このようなかたちでの「故郷」とのつながり、アイデンティティの「想像」**（36行目）

これらはほぼ同義表現のリピートであり、これらを生み出した原因として、

①**マスコミュニケーションの発達**（24行目）

②**大量移民**（24行目）

③**飛行機、舟、列車などの交通手段の発達**（25〜28行目）

④**テレビや新聞の情報、旅行案内のパンフレットなど、「故郷」のイメージを喚起するもの**（28〜32行目）

があった。従って、

(イ)は「正しい情報が得られなくなった」がおかしい。「①マスコミュニケーションの発達」に反する。
(ロ)は(イ)と同じ。「かすかな情報」が①に反する。
(ニ)は「飛行機などでの行き来が容易になって」については③と適合するものの、「移住先でも維持できるようになった」がおかしい。これだと人々のアイデンティティは「移住前」と「移住後」で変化していないことになる。あくまで「新しいアイデンティティ」である。
よって答は(ハ)。

問7 39～44行目は、コロンボを具体例として論じた箇所。整理すると、

故郷にいる場合
・カースト制度
・貧富の格差
←
「シンハラ人」としてまとまることができない

都市に出てくると
そのような矛盾や障害（カースト制度・貧富の格差）がない
←
「(5)真正なシンハラ人」が想像され、生み出される

つまり「シンハラ人」というイデオロギー的まとまりを阻害する因子、言いかえれば「不純物」がない、ということだ。また32～34行目に
母国にいたときには感じたことのないような「国民」としての、あるいは「民族」としてのアイデンティティが……かなり純化されたかたちで生まれてくる

ともある。

よって答は㈡。

問8　もうここまで説明してくれば、また**問2**・**問4**の解説からも明らかであろう。ここでの「『連続性』を欠いた」とは、「土地（故郷）とのつながりを欠いた」くらいの意味になる。

よって答は㈺。

㈠は「消えたりして」がおかしい。確かに「想像によるアイデンティティ」は突如現れたり消えたりする不安定なものだが、ここでは「『アイデンティティ』の想像が生み出す危険性」とあるように、「消えた」時の話はしていない。

㈩はむしろ逆。「想像によるアイデンティティ」は、貧富の格差などの「不純物」を無化してしまうのである。

㈡もむしろ逆といえる。「不純物」がないゆえに、熱狂的な「まとまり」を生んでしまう、それが「危険」なのである。

問9　（Ⅰ）これまた、ここまでの解説でもはや明らか。「本来」あるはずの「矛盾や問題」とは、**問7**のコロンボの例で挙げられた「カースト制度」や「貧富の格差」のように、人々を「国民」としてまとめ上げることを阻害する因子のことである。従って答は㈠。

㈺の「新しい国家が直面する難問題」は、全く本文中に論じられていない。

㈩は「地道な努力」が全く的外れ。

㈡は「矛盾や亀裂を生み出す」が全く逆。

（Ⅱ）答は㈠。

㈺は「都市」での話になってしまっているので不可。ここで言う「本来」とは、「移民たちが本来生活していた故郷では」くらいの意。

㈩は「努力」が的外れ。

㈡は「格差」が生じるのは、「国外」ではなくて「故郷」においてである。

問10　共同体意識がインスタントに生み出されやすくなったのは、それが故郷における実際の生活に根ざしていない、「想像」の産物に過ぎないからである。よって答は㈡。

㈠について。「まとまってひとつのコミュニティをつくるようになった」のが理由なら、「故郷」でも可能なはずだ。

㈡について。「即席につくられたものでもかまわない」がおかしい。自分たちの共同体意識が「即席」か否か、移民たちは意識していない。

㈢について。本文で論じられているのは「故郷」を出て「都市」に移住した人々の話であって、「故郷」が「急激に都市化」された話ではない。また「自分たちの文化を自由につくることができる」だとポジティブな内容になってしまい、不適。

●メモ●

3章

【問題】（演習）

出典…『花月草紙』　／　静岡大学・04年・改

現代語訳

ある人が、桜の花を塩漬けにし、壺に貯蔵し、封印をしておいた。客人がいらっしゃるころに（封を切って酒の肴として出そう）などと思って置いていた。夏頃に客人がいらっしゃったけれど、酒も召し上がらないので、こんな時に出すとしたら、玉の杯の何とやらというような心地（「玉の杯の底なき心地」〔＝外見が素晴らしいのに実際には役に立たないことのたとえ〕）がするから、と思ってその塩漬けを出さない。また、別のお方がいらっしゃった時には、酒を好みなさるけれど、風流を好みなさらない人にどうして（出せようか、いや出しても仕方がない、）と思って（壺の）封を切らない。秋の末頃になってしまったので、このごろ返り咲きといって、あちこちの枝に、頼りなさそうではあるが咲くこともあるので、これ〔＝貯蔵してある桜の塩漬け〕をそれ〔＝返り咲きで今咲いている桜〕と思うとしたら、たいそう恨めしいから、と思って出さない。（陰暦）十二月の頃、いつものように草木を売るところでは、桜はいうまでもなく（売っていて）、藤（の花）なども咲かせて売っているということを聞くので、どうしようか（、いやどうしようもない）、それ〔＝売り物の桜〕と同じと思われるとしたら、たいそう残念だ。新春ももう近い、だからといって貯蔵しておいた桜の花を無駄にするのもよくないと思うけれど、客人もいらっしゃらないのでどうしようもなく、ただ（風流もわからずに）酒を飲む人が来た時に、封を切って桜（の塩漬け）を取り出し（、酒の肴に出し）たところ、（その）客人が（桜の塩漬けを）ちょっと見ただけで、すぐに食べるのをやめたまま、「これは塩気のある花だなあ。最近あるところで酒を飲んだ時、盆栽として植えた桜を（その家の主人が）出しなさったので、（その盆栽の桜を）杯に受けて飲んだ。花は塩気がないのが良いなあ」と言ったのを聞いて、（この人は）涙を落として残念がったということだ。

解答

問1
(1)＝いうまでもなく売っていて
(2)＝残念だ
(3)＝無駄に
(4)＝どうしようもなく
(5)＝すぐに

問2
a＝ひとしから
b＝植ゑ
c＝悔い

問3
秋の末になると辺りの枝に少ないながらも返り咲きの花が咲くこともあるので、せっかく秘蔵してきた桜の塩漬けを出しても、今咲いている桜だと思われると残念なので、客人には出さなかった。〔解答例〕

問4
風流な思いつきを実行する機会を逸し、仕方なく桜漬けを出した相手にもその風流が理解されなかったから。〔49字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…『花月草紙』　／　日本女子大学

現代語訳

ある医師が「あなたは必ずこの秋頃何々という病気にかかりなさるであろう」と言うのを（その男は）不快に思って、「どうしてそんなことがあろうか（、いやあるはずがない）」と、秋までは言っていた。（ところが、秋になって）とうとう（その）病気になったので、言い当てた医師に顔を合わせるのも面目ないと思って、別の医師を招い（て治療させ）た。（その医師は）あれこれと薬を投与したが効果もなく、初めのうちは内臓の疾患にちがいないと思って、内臓を治す薬だったので、胸のあたりがいよいよ苦しく、食べ物も顧みないので、医師も（間違いだったと）分かってその薬は止めた。今度は発汗させて治そうとしても効果なく、下剤で処置しようとすれば、腹痛がしてますます苦しむばかりである。どうしようもなくて、試みにと思って偶然調合した薬が、その病気に効いたのだろうか、飲むとすぐに胸の中がすっきりして、とうとうその病気は治ってしまった。（その男にとってその医者は）命を助けてくれた恩人だというので、家の財力を尽くしてでも（その恩に）報いたく思ったということである。

ところが、「この秋には、必ずこの病気になるに違いない。この薬を今日からお飲みなさい」と言うのを、もう一人の男は、「どうしてそんなことがあろうか（、いやそんなことはない）。しかしそうおっしゃるならお飲みいたしましょう」と言って、（まるで）他人事のように（薬を）飲んでいたが、とうとうその病も起こらず、いつもと変ることがなかったので、（その男は）「だからこそこんなふうであるにちがいない〔＝病気になどなるはずがない〕と思っていたのに、あの薬は飲まないでもよかったのに」と言ったとか。

解答

問1　病気

問2　C＝1　　D＝2　　G＝1

問3　B＝1　　E＝3

問4　医者に指摘された病気にかかることなくいつも通り健康であること。

問5　1

解説

問1　文章の内容から類推する。ここは、①「くすし〔＝医師〕」が「いたづき」にかかるだろうと言っている、②「いたづき」にかかった人物が「くすし」を呼び、また「くすし」は薬を与えている、③本文中に「やまひ」と言い換えられている、などの点から、「病気」のことだと判断する。

ちなみに、この文章は江戸時代のものなので「いたづき」と濁音になっているが、中世以前は「いたつき」と清音である。

問2

C　基本古語。文字通り「顔を伏せる」ということで、面目を失うこと・不名誉の意に用いる。反対に「面をおこす」と言えば、名誉となるという意味になる。

D　これも慣用句。家の財産を使い切ってしまって家運が傾くということ。同様の発想をするものに「傾国・傾城」がある。これは「城や国の財力を尽くさせてしまう」ということで、美人を指す言葉。白居易の有名な「長恨歌」の冒頭「漢皇重色思傾国〔＝漢皇色を重んじ傾国を思う〕」を想起しておこう。

G　「のまで」の「で」は《打消》の接続助詞。未然形に接続して、「～ないで」の意を表す。したがって、ここは「飲まないで」となる。

この点から、選択肢は1と2に絞られる。また、ここは男が薬を飲んだことを後悔している発言なので、2では文脈にそぐわない。したがって、1が正解。

問3

B　「たまふ」は頻出敬語。その用法をしっかりと理解しておくこと。四段活用をする場合と下二段活用をする場合とで意味が異なる。ここでは「たまは」とあることから四段活用とわかる（下二段活用には「ア」という語尾は存在しないので、あれこれ考えるまでもない）。したがって、用法は「尊敬」となる。

なお、「たまふ」と同じように二種類の敬意を表す敬語には「たてまつる・まゐる・はべり・さぶらふ」がある。余力のある諸君は一緒に整理しておこう。

E　「まゐらす」には「たまふ」のようなややこしさはない。用法はいつでも「謙譲」である。

問4　「かく」とは「このように」の意を表す指示語。したがって、ここでは「かく」の指し示す内容を答えればよい。「このように」というのは、秋の段階での男の状態を指しているので、具体的には「つひにそのやまひもおこらず、つねにかはりし事なかりしかば」を踏まえて解答することになる。しかし、この箇所をそのまま訳しても答案の形にはならない。そこで、手を加えることになるが、その際不用意にポイントを削ってしまわないように注意しよう。

・医者に予言された病気にはならなかった

・いつも通り健康であった

という二点を盛り込んであることが必要条件である。

問5　この文章では、病気になることを予言した医者に対する二人の男の態度が述べられている。すなわち、最初の男は医者の言葉を無視し、二番目の男は薬の効果を無視したのである。ともに、医者の言葉を信じていない点で共通している。したがって、1が正解となる。

2は「非科学的な医者」と言えるほど「科学」が問題にはなっていない。また、「主体的な」と言えるような行動を男達はとっていない。

3は「誠実に従う」というのが反対。誠実に従っていない点が大切なのである。

4は「病気の流行の激しさ」というのがおかしい。また、男達もそれに「抵抗」したのではない。

【問題】（自習）

《補充問題》

現代語訳

人の顔で、格別に良いと見えるところは、会うたびごとに見るけれども、ああ、美しい、見飽きないと思われる。絵などは、何度も見ると、目にもつかなくなる。近くに立てている屏風の絵などはとてもすばらしいけれども、気をつけて見る気もしない。人の容貌というものは興味深いものだ。不細工な（顔の）造作の中にも、一つは良いところが目にとまるものであるよ。（しかしながら、）みにくいところもそのように（他人から注目されている）のだろうと思うとつらいことだ。

問1 (1) (i) ヤ行下二段活用 (ii) 連体形

(2) (i) タ行四段活用 (ii) 未然形

(3) (i) タ行下二段活用 (ii) 連用形

問2 A 良し B めでたけれ C 良き

問3 (i) にくげなる (ii) ナリ活用 (iii) 連体形

L2T
高２難関大国語

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製